詩北詩會
句解
詩北詩會
句解
夏之

誹諧古今句鑑

寛永十七年
辰六月日
朝倉生

誹諧古今句鑑　夏之部

更衣　夏の花衣　袷

袷　世花さくけしの一色なる　来山

袷　色衣　子さ見色衣の人　嵐雪

袷　や　文衣　許六

一とろふ袷よりるや思ふ素　其角

更衣十日さくハ花ぢのり　野坡

ちきハく這子立さうこもく　宗瑞

一日て去やむらくの衣かく心祖
吹返す一るとゆるしき拾ひ春来
ふきや神うの色衣雪とらんて 祀亮
まうらるて眷本うるる拾ひ平砂
条ていて色てよちさうなるや云其禮
ちよと色らと母のさ宮や云衣祖徳
色やけハ老ハ色うう衣の雀冊
酔ふむせる色のえ乱や更衣宝馬
拾色てふくや袋の裏おて木丹

耐廉ふ詰て曼陀羅を作す

夏一

文衣うのう織らめ罪ふし 古 国女

ツくま 荒摩祭

なるよ虚なきくまれ渦の数 雀郎
つまれと神やかこむ渦れ数 雀舟

かふ灌 佛

きらめ世ふまれて人まる佛ひ 京 助叟

清佛やめてうい事ふ寺と京　支考
花清者小僧ふ乾弾の[illegible]なりの　て由
清佛や後世世のけて一柄　秋心　祖
自ら影乃をほしけし仏生会　涼岱
清仏や絵むこうろふいとそこ　木丹
春風うう年案奥佛生舎　千外

若葉　夏木立

紫松の漕さうう殘せなつ木立　才磨

年寄ふ若葉の雫乃朝日うけ　其角
若葉ふく風やたこの切ふ　嵐雪
先家を用のまふ谷も若葉　寸吟
浴うて若葉乃ふゆくメア共　祝子
古蔵を隠りて梢のうそる　安士
松の家ふ新くくの葉ふ　春来
碧乃羽も沸芽ふふ百木立　希因
登上てきてう椎乃若葉ふ　蒼狐
若のるうて若葉の月影の　桃水
生垣乃ぬとそ百代乃そふ　玉国

松杉小風の遠ゆや夏ふ去　雀舟
茅葺して茅屋ふさしの去　花蓋
ゆらゆむ茅葺小神の物とうめ　仙里

懐旧

去ぬるの夜疎しきとゝ夏ふ去　乙由

黒髪山画賛

青葉ゆらの去　悲心涼き法山北　存義

ゆゝ葉

ゆゝ葉のちるも地ゆれ蔵ふ　紀亮
わらら葉や人を限痛ふ落る涙　玉園

卯の花

うめ山や一先ゝ田の水　阿坡
卯北高や日光を八塩はゝ紀　百里
卯乃花や卯のとき面北白し　芝蓑
うゆゝるや新茶ふ葉る云の垣　賀太
卯の花や里北道北初月夜　操舟

小町画賛

落うらめ雪のさかりの木　虎佐

牡丹

古廟に春をうる牡丹に嵐雪

此家に是ハとおもふ牡丹に雪吟

ちらちらと崩まてたる牡丹に蔡以

なの花ハ我新うゑし白牡丹　柳五

押出して花一輪ほこれ　夾東

夏四

もろうまの雪を拭むや白牡丹　蒼狐

陽炎もそゆるうゑの牡丹に　春郎

十日の雨も二夜ふるほうこう　亀文

面影を洗ふて富の牡丹に　梁山

ひらやうに花のあるの牡丹に　龍昇

一瓣ふるまき日御やメおうん　治峩

左右佩むうゑの牡丹の色代　吐風

牡丹こそ唐のやまゝの花ゆうめ　石涼

花の色溶て牡丹と嘆ける　宝馬

牡丹の れ酒に風情ハ奪ふ　律宗

ちるくらふ水のうちくれ牡丹ぶ花路

かきつ杜　若

雨のはやつ抜てゆくこゑつりく　信德

杜若をへ水はおかしかてそ　其角

咲中ふ繁さのうちかくれさく　来山

留るかと面ハ陣とものなりけ　竹佐

伸る湾かくれる湾ヶ杜若　乙由

色沢ハ池ハ淋ふ寄る燕脂花　英朝

けーのむ

蜀葵花

いく程乃世ふ寄葉也、ちしのを　支考

けしの花張れ古き彩ふ　貞佐

ちらしやなりかなの花盛　蒼狐

ゑんとす除をちうわや幸しのむ　公曳

けしちるや外のをこ八孤をひし　太義

窺てゑ出おれてゑんきゆ幸ーせむ　笠森

ちくゑちくちる浅盛やけしの花　宝馬

もきとうふちるとやまれ花心　芭蕉
夕雲や雨ちる色の百合　[illegible]
多氣もいとふやけしれむこうろ　素人

別伝

ちる時の心やすけよ雨ーれもふ　越人

たけのこ　筍

筆を伸ふたのまこと竹の垣　来山
竹の子や出る垣瀬　吳文

伸の子こ踏殺く夜ゆと成ぬ　百童
筆ハ切とる鬼の腕　素盈
筍や出そもの腕もの紙の先　玉圃
竹ぬけ子ー羅ぬらせる寺乃藪　如竹
伸乃子や芽ゆて尺ハとしいもの　木丹

ことりふとうーなて

竹のふや千代とふ益まきー　存義

麦秋

拙き合ふ子供のうたげや　麦　畠　游力

月の夜ハ犬もほゆるや　麦の波　地川

花嫁の笑ふもおし　麦ぬ秋　宿舟

麦枯て山畑淋き　卯月のあとゝ　外

かつこうの

杜鵑

百明の使ひ殘るほとゝぎす　松翁

初ハあの月の時ゝ　徐流

一夢の如ク捨るつやとゝぎす　ゝせ

かとゝぎす時や御水みさ濁　尾張　丈艸

時けハ落てあるゝ孫さんやる紀　野坡

大ゝ多ふて一るハとゝぎすの見　上夕　佐

時乃山元とゝてほとゝぎす　乙由

葛城やけさかも空の杜鵑　尹督

初音ゝらゝ　ゝ　京ハ　時　心雅

森ゝゝ小千尋の庭や蜀魂　蒼狐

殘るもの松風ゝゝ　梅郊

恋ゝ　初音　ほとゝぎす　雅郊

眼うさめて　松の　ほとゝぎす　涼山

落くもる山も霧起る杜宇
おとさきに啼くを彼の寄合せ 拝童
郭公きくや自刎のほんのくち 沾涼
杜鵑富士乃高ねハ霧もたけ 宝馬
出てうら眼ハさめふ色かとゝ
子規又ほし月乃いりて後 乙外
夜光る玉を一ツ恋ほとゝぎす 雅月
人ゝうは城をこゆる郭公 共禮
おとゝぎす起出てうれハ早も形 岸富

侍杜鵑

うれとゝ月を耳もこのかとゝぎす 望一
子規しくとゝて霧入 寄 調和
望乃夜ハ深させてうれよ子規 うよ尼
比の夏て奥歯ふ ゝ ゝ杜宇 存義
ほとゝぎすと千二月三日の月 小知

越女西賛

神うけて待ふ虚空ゝ ゝ ゝ 旧室

妾落命

我ゝ世ふ夢古しゝ月ゝ ゝ ゝ 泥
悼

風も爰告るを　梦メそ　ほとゝきす　宝馬

年をかさねしるつきもはるとなりて
五月の夜はの　短うきをとゝを　惜まれぬるかな

かゝる　まれに森のこれハ今　二条めぬ　秋方

かんこゝ

風ふるぬ　夜の雫　かんこ　ゝ　大内　廿八角
　　大内　教　衆
　　乙由

一村ふひぐりのものをかんこゝ　蒼狐
岩ぎるの糸も昼森をうぐいす　春郊
うんこゝ　峠や　岩　のうろ　侯　炎知
梅尾い　桂尾ゆ　　　　　　　　
かんこゝに訓て　　　　　　　　存義
ひとゝ居ふ　馴てかゝ　宗良の町　伯幹
中くふ　花月　宿　ますかんこゝ　左簾
　　宿　やうぐいす　不言
ちゆねぐらう上つけ　すへ出るふ
まても一里くや　かんこゝ　とと　涼佑

蔭涼産

蔭きりや池さく蔵るやゝ　杜公曳

よゝきりや引て芦屋北人の母　呉仙

きりゝ〳〵し苦ハなきをと笑え亀　乙外

蔭茶や拍子そろへて　母大ユ　晋窓

枝の蛙

ゑなちて枝の初ちるや雨の雫る　蛇舊

夏十

枝ゝ峠　蛙や花ふるくれなせ　雲風

えゝふ　蛙ふるくや　袖の面をし　玄圃

かいと

鰹

蒲鉾を活ておけむ初ゝを　芭蕉

大勢の中へ一本　松魚の本　嵐雪

能の為先　廻着を　祇て　拭　其角

尋常ふ家をきれらや初鰹　春来

勢ゝをきなる所分ゝ初かつを　古祇亟

山魚小森すのこ　初鱸　蒼狐
滝見せんのほとかまし　初鱸
鱸うれ光らん蒼き多き　寿ひ亀文
晴ふ竜鱸の出んと四里四方　梁山
一町を造て有り　初のつを　翁人
孫も子を法師ふハせ　初松魚　沽峩
江戸一の鯨ハ多のうハ　初のり成　宝馬
世ふ寿きもれさ　鯨時　素角
鮭晴をこ入る　鱸の雫　の水　過橋
鮭晴のおふ魚ふしきら　鱸　花弥

舟水の深由く　鱸　仙里
海底の名波　初つを　左簾
秋鱸鬼の首と　る　寿しき　北　沾涼
引提て底殺へ通　るのりを　乱　津富

扇

落す又拾ふ扇の　ちゃ　北　貞佐
地蔵うるはいて　ふや　おらん　呉久
連を方ふ舟よ　る　扇　の丸　金洞

うちわ

團扇

青丹よし白き雲扇も奈良うちわ　来山

似蝶の羽色とりどり團扇賣　木孝

故郷の月やあくがれ出る雲扇うり　素芹

独寝の雲扇か帳の戦きに　存義

夕松か團扇の風ぬるの　もと　李克

八重垣を繁り代や奈良雲扇　不言

曾て忘れ老の友なり　俳團扇　津富

なつのひ

夏日

行雲を蔭て居ぐ見ぬ夏中森　野坡

遠の沢きりかなりり夏の山　弥水

鉄炮の音とまる小雲る卯月　野径

會盟

夫らのさめて又よし夜料理　其角

なつのつき

夏月

涼さのかさまちなしやあまの月　貞徳
天の戸ふ屋さしもうふ夏ぶれ月　貞室
見とれていろ秋とも夏のこと　貞因
短夜も宗いのこと亀月の色　そて
市中ハもれ白ひや夏の月　几兆
夏おほこ月ふ成める光ゆ　宋仲
涼る事ぶおもひ出る夏の月　素玉
夏の白ま襦はや八月夜　津富
見ろろもふ軒をめろやる夏ぶ月　雪高
まくしちや包むふあする森の月　不言

短夜

うう夜や夫人間の遊の時　北枝（加賀）
冷ややもやや史殘る夏の朔　藤羅
短夜やかてる訪へ禅の夢　梅寿
てや涼ハ短しと教とて人色　雄砥
短夜や月ろくと朔　朔　素水
月せり禅なき里の夏の夜も　肇長
明やまき夜の情て朔　素　宝馬

待てと求め風の恨みや深よの徒　角庵

鮓

めまきえの石の灯影や一夜鮓　芋路
かいしゐ屋廣葉乃笹の一枝鮓　雀郎
玉川(一夜とまるや鮓の旬　雄跡
鮓桶の明るそ名殘一夜妻　左簾

題別

ほ〜桶やちれめとも山て後の月　梅翁

蚤

きらきらる蚤ハはをふと気蚤の行　其角
景清もいのきれ〜蚤の行衆哉　才麿
恋てかゝる蚤小さきめ武士もは　中好
おこうの蚤とる指の接へやう　羽渡　羽寒
蚤恨し蝨めふ明行徒の了見　乙外
あてめ夜氏恨をの稜を蚤の行　秋色

蚊帳

蚊のあらハ紙ふ夏ハはしめうふ　伊勢　正直

追ひまとてやとんとを追ふ帳の内　京　処勝

やとんとして居帳ふ行ふん女房達　好春

蚊を焼や襲如の国乃さめこと其角

故老共や帳法る方ふ花ひとと丶

然ふ蚊への中に壱あり念佛遠来山

法雪やはきなつきふくい蚊もくさ春魚

ふやとんとや結ふ偶きふ孔百里

旅人や嘸ふの蚊乃紙衣沾荷

世の中を蚊ふ一ふ蚊屋の内押居

蚊乃あ城葉めて清の夜明北春来

帳ふて斤ふ旅高の那蒼狐

とも共の帳ふ行ふき面旅の京呉夕

蚊の壱丁蠅乃恨さを高き色沾峩

蚊ふふふふふふく建て苔社丸空

ふふれや蚊もむやくれ国の百花脉

蚊のあも通徒かふや居乃軒田撥

美しふる国扇のはきや夕蚊や夕田女

樹の内へ蔓なれさまつて高の山　芦結
枝の葉ふ茂りて立のぼる坂きぶ　芦英
かやり出や妻ふ結けて天のつるゝ　笠秋

接

坂ふ暮ぬ蔓つゝく葛藤の山接　冷く

蠅

蠅ふいらるゝ蠅ふらつきなき屋敷ふ　子堂
蠅をうゝ肌きう　擦の蠅　尺艸

面の蠅を乃へを歩行多　超波
赤兎馬を蠅ゝ手蠅のかゝふ　蒼狐
朝の間ハ蠅も赤ゝ多ゝし魚の店　素芳
織やめハもゝ蠅や機の上　左簾
却みも涼あれハそ夜乃蠅　李克

蠅　虎

蠅とりて虎ふ蠅ふ　小坂ふ　木丹
厨むや蠅とり　坂ふ面ゝ　市仙

なたつむり

蝸牛

猫の子ふ嗅れてみるや蝸牛　戈磨

古庭の石の苔ふるつちう　素盈

角出せよ地ハ一すのかくはまつと　佐幸

氣のつくと仏ふる時

今や雫不見の祖ゆく蝸牛　仙崖

和たる

蛍

蛍火ハ石の一の中の葉を落るふる蛍ふ　滑川梅翁

ほるるとや秋既破て芒来ち　芭蕉

ちをかひふ町へ出る蛍の孔　一林

ふるふやや星の器さけ息吹ひ　月下

わるん亀のなるまのうへやゆく蛍　蓮之

ひ拙む蛍ふ　なるる力　春来

蛍ふ仰て我ふ宿乃ちるる　蒼狐

蛍ふそ休む息なるを俳田の搖　梅郊

傘の往来ふ初ふほまるこのな　龍昇

めくしくも秋をもて蕃の外存義
川えれてあ際ふくやぬほ家　窪舟
むゝ百ふ乾うて　斬るゑゝの乱　風舎
生あふ月疫系文のゑゝず　木母
風の蕃ハやハゝ　焼す　蕃ゑ　婆百

うゑ
蝙蝠

蝙蝠もかけろゑ　類ゑず　蒼狐
うハゑ百ゑ古さ　斬塔ふゑゝむ　操舟

蝙蝠やれあ　況陽を文、うゆ　存義

うゑ
籟川

籟法えよ若きハ人の用ふ立ゑ　信徳
夢ゑゝうハ鉢も停ゑむ籟　舟越人
人のあ乃かゆ紀あを移　縄　曲巷
ゑゆゑゆ白繁もえゆ籟の　五筋（義信）
籟ハ是しゑれて籟　舟の園の　猩　蒼狐
移法ゑや己ゑ子舟の雲乃業一巴

夏行

仏堂の夏書やさゝや仮乃宿　其角

たゞとゝも坂を殺す半夏百日　醤千鶴

夏こゝやゆ炉も焚ふ谷乃坊　公曳

夏書して意形る世と成る急　雅叶

書ばたく一夏こゝろん温泉の滝　慎我

たゞんご

端午

上童寺に粽かはらぬ　やう　西吟　拾別

東京や町も五尺乃菖蒲太刀　栗堂

彩子也妻も皐月のむくりに　紀亮

ゆやめ乃代引て笑ふや泥まみれ

君の代ハ帰ってんまる塊の小沽　我

和を入て女使乃　塊か　邪　存義

染ゝくれのみ日の月やゆて餅

押へしい男ハ子うかけう姫酒　樓川

丑りや菖蒲ふく日の古形鳴　魚婦

手水の仮うち際や　塊　鄭　子砂

つくゝゝ麋く懺へひとり　お方簾

玄子結

若人の意地や張弓玄子結　紀亮

素引して望のひとりと玄子驚　雀郎

印地打

玄光ハ源治の子也印地打　信中　枳邑

大了鞭ゆや印地の名ゆれ　玉園

若竹

若竹の末も遠くなるまゝ　秋色

若竹ゝ世なく伸て染をふく　古　雅徳　古

若竹や如雨露のゆれ翠ゆる　春来　心注

竹の伸や一ゆ〻ゆ〻ゆく　紀梅郊

初ゆ也竹の青も若ゝ一日　士存義

若竹の言葉ゆかをそうつくしき　吐風
若竹や青をふかす晴し朝日　和曳尾
若竹の雫ゆさよ日てり　白玉園
若竹乃志なへや風も定まらぬ　卜人
若竹ふとしけ春なを見初けり　花縣
忘るの射場みゆえうちきとり竹い

田植

早乙女や汚れぬものを吸ちのこ　来山

姑乃麼や早苗の一株かゝ　柳居
植てゆくるを稲妻や早苗とり　希因
揆嫁よ天下けゝ父母乃田植　蒼狐
早乙女やぬるぬ姿を孤のしゝ　梅郎
ゆゝめやるのまゝ見の揚上吸　吐風
うゑるくしゆゑ植し田の夕まゝ　買明
階子田やうちさけゆくる植仕也　何来
指を〻よ田植と宵に物くもむ　雞冠
ゆゝ女角吸のちゝ書や松の風　婆百
うゑる田乃はゝまやゝさえ女一のち　津富

楝花

うゝうゝと楝や雨の花くもり　芭蕉

大木のさゝら弱けよ花　楝　吳仙

塵なくや株もさく朝ほゝけ　蓍十

紫陽草

紫陽草の中合せて咲つゝ亀　仙窟

あちさゐのふるゝ旭　夕日　つゆ　乙由

紫陽草の下もくゝ水や花菖川　加賀　芦九

あちさゐのみもいろ〳〵ふるゝや俤　貞知

紫陽草やむさゝを八重ふ咲まろめ　宝馬

萱草

朝夕や花塵ふ世事をまれくさ　吳朝

わすれ草さとも花ハ咲よ夕ゝ　葵足

花さくハ指ふゝうさや夕ゝ草　敬之

うきくさの

萍花　藻花

萍の花を居る日和の那梅寿

うきくさのおふ池くゝ風もなく　雀舟

ものをやひとり見おせはほろ〳〵と　吐鳳

あおうめ

青梅

青梅や升ふ志ろ〳〵花乃数心祖

妾啓命

実ハとろ〳〵代らて梅の蔵ミ分　淦て

つけ

漬梅

むらさきを朱ふ奈ふ中梅ゆ乃　怯我

漬て干す実も紅梅乃ちりぬ　吟松

さとたれ

五月雨　梅雨

五月雨ハ堀やきゆ　祖河望一

傘の下を時雨さ月雨玄砂
白雪や青くもならぬ梅雨の中不玉
五月雨や色紙まくれし絵の上芭蕉
五月雨ふかくきめしものや懐田の稽丶
湖の水はさそふ月雨衣来
さみだれや硯箱なる唐うらし嵐雪
五月雨や古きみもおと通る人其角
ちるれいつの柳を使古き誘従古
五月雨や梅田の中はかい作ふる泥足
五月雨や廿日京見ぬ日枝の山伊勢三千風

夏 九四

めつるや梅雨の中の傘の雲京晩山
五月雨や使者馬の尾の投糸田白雲
さうれや氣使きちがき捨小舟貞佐
五月雨や京宮ふらかるる松京竿秋
五月雨や二十四孝てるる男水戸沽隣
さみだれや使さくめきて言もかし宋仲
くふると人はいつも也さ月雨心雅
はるぬ袋つくく書しみ月雨湄北
ちるきのつるれる笑や影の仲蒼狐
五月雨や一日塔了住く隣丶

五月雨や夜もちのうの焼き煙　蒼狐
石小矢を刺す時そさ月雨　涼俤
梅雨既竹の子茂る垣根哉　春郊
五月雨や陳うら俵るかア　再梅寿
五月雨や晴き小暑小暑　雅郊
物小皷の色こそ見西瓜　梅八雨涼山
五月雨や黒木小をきき　古鳥居亀仙
人ちら見梅雨小晴ちう　変中月
ちうれやうう志まりる神の松　吐鳳
五月雨むう井筒乃玉　存義

閑雲も俤て使就やさ月雨　宝馬
孤火小時雪見えうみ月雨丶
谷を這う温泉の烟アやさ月雨　津富
さうれや陰子羽迷ハ杉園　美淡
鶯今出うる時を皐月雨　天鳥
雨きハ降て雨ふる皐月雲高
五月雨の眼を徐さ夕日多　窓舟
ちうれや青ちく行うる桔梗乙外
山も川も陰埋ち青ち皐月雨　貞得
五月雨や雲小かうちれ月小花と　田園

雷の高き時て皐月雨平砂

水雞

ひそくもけ淋しき水鶏哉　蒼狐
池をし水鶏の声てくきふさ〳〵　操舟

うくいす
鶯声を入
うぐひすや草葉ふ老を啼　芭蕉

鶯や啼を引梅ふ声と入　佐國

せミ
蟬

死て死ぬきしきもアンな蟬の声　芭蕉
蟬暑しくや蟬淋しく蟬無し　心祖
初蟬ふ淋しく面もてはよ急　梅郊
杉高しはしくも蟬のあまく参　亀文
並松や入日ふ絞る蟬乃丁急　公曳
蟬なくや水ハ水の山やとき　素竹

夕せきや老僧ゆるす　峯の雲　津富

蟬峠や蔓の透きうつる　花緑

雨雲裂くや竹のうれ蟬の声　青芝

夜山や雲ふ地を出し虫の色　雀舟

いつちりよ蟬のふるくる蟬の音　蛙声

柿色の夜ちらせと蟬ぬけうら　如雷

こをりむろ

氷室

蟬をくゆや氷室の山ぐき　春郊

君の代や氷も室のかつて　岐貞知

老ゝ歯のかけぬ多めや水隈　貞川

涉なくのきや一雫ゆく　氷の貢　五連

氷室詣

京の夜の雪を海底の富士行者　玉圃

高白ふ老尺おろす雪やふ二詣　市仙

不尋詣ひりるや峯をけて舟　左簾

祇園會

月雲小山八陸らし　祇園乃會　風虎

祇園会や神のまふくる向山　如貞

祇園会や向山かやる人の山　大坂　保友

月雲や杉系西へ入ぬやま　治德

月かこうや兒の家乃前化粧　曾良

祇園会や山又山共京めぐり　紀亮

夜をこめて鳥の函谷祭　亀洞

神輿洗

夏　廿八

清むとて西もあをらや祇園町　存義

石戸天王祭

山のあれ国とほる宵祇園の会　宛部

世の学車や祇園正しの高ゑ　宝馬

あつさ

暑　日盛

水うてや蝶も舟をめぐるとて　其角

沢深の肥りるるあつさ　嵐雪

広いるを去さく岩て照日多　仙蓬

道端の蘭千すゑのありさま　疫狼　許六
日の岡や古のきて暑き牛の舌　粟津　正秀
猪ゐうゐ何ふうん反ゐうも　含棘
蜘ひるはさうゐ暑て　憂　和　この怒風　大津
暑き夜やいたくと足け　全　所　尚白
李もる庵の埃ひの暑　この孔　万乎
負ひて子ふ髪なひて暑　北園女
夥ひ砂ひまちこもはつさ多　風国
柳さくゆにゐて暑　北　旧室
暑きはや指もはれぬ紅ちけ　子代尼

なまかゐ雨雲ひゆる暑　このか　蒼狐
はちひや嶽の岡　えゐ小　初京
臭攻ふ柳の足ゆ新　髮　跡北
傘ひ白ひてもうあつはこの孔　涼帆
茶山にまえ幅ひ暑北　梅郎
庵の青ハはひて山路の暑ふ　春郎
うゐあふ暑き哉　切る大路北　栗堂
ひ女ひ白ひて暑き面　庵北　貞如
ほつとを　松落るはの暑　この　吐風
暑きと苦　松茂ひあゐさ北　東道

暑きひや海を埋める雲の影　平砂

暑むしや枕ひとりを抱き行　京蝶夢

水うちもとを拭る暑のなを　釜砂

多賀月やナほ残西の彼方き　晋窓

國西の彼方かくむあり　和水

いくつちをきくゆ夜は暑が　丸室

おろおちは彼涼ゆるの暑のる　不道

一里塚が桜さくなき暑かな　宝馬

鬼蓮の沖とともるなつきが　津富

小ゆくへ先通さられ暑のあ

日ちろや談家ちる祖の岩

坂のぼりが耳せる夜の暑ろが　雀舟

日盛やけ急きくうゆ　のま木丹

暑き日や乃ハ鼻月の汚き馬　花蓋

砂風ふたてこめ日乃暑のれ　寛之

達摩賛

来る人が抱ともいたるぬ暑うが心　雅

高きる人さかくて

れもの事いきてみる暑が暑が　窓雪

雲峯

峯はくる雲乃葉ゝ夕ゝ　貞山
浴衣着て道者姿みゆる　宋屋
一日小雪川くつれけり　心涯
白糸ハ林葉　吼らん雲の　蒼狐
立乃ぼる地獄の埃や　春郎
巻ゝ入ハ古木ゝ　亀文
入海小口も青ゝ　梁山
沖の帆やかさなる　玉圃

何かなつ　や夜乃雲ゝ峯　露水

白雨

夕立や雨を巴ゝて帰家　暗其角
降ゝさよゝちからゝ夕日　彩衣来
夕立やけものなき人ゝ　脱ま乃　専吟
ゆゝくゝちや雲ゝ　ゝ　乙由
夕立や雨にもゝ　乃　佳月　乾什
白雨やゝくゝ　の　梅郎

夕立の色研ちぢまる叢　この邨亀文
ゆくちて　篠ちらしは乃公多祇扇
夕立とまりて乾くや人の汗百童
白面や人ちりまりて生さうかう
夕立やあつ北もろ乃多車不言
白面や誘ひ添ふるなれ言　拉舟
ゆくちや降かくしゆく人の吉　雄丹
夕ちや濡ぬて　女中連郡長
白面や畜も目乃さめしうか万古
ゆくちや向ひ廓へ言ぬく　津富

夏　洲二

夕ちや吉を明ふ馬もめを風存　義
ゆくちの　不二北夕ア北芦皓
白面や言かひちちなめし　壱波
夕立や心浩さ　二　王門宝馬
夕立やみもて水をたくさい
ゆくちや舟て　橋乃悪花弥
夕ちや岸ア人ち紀洲田の橋木丹

納涼　涼風

夢ゆめとこそ二こうの形納涼床　露沾
日ひかれて汗も入れぬ夕すゝみ　傳前　生房
涼しさや橋を渡るうの花　来山
ゆるもの答のめ流もなり　寂蓮
水とねく会せやく影や夕すゝみ　沾徳
大ふ迄犬と居るの夜納涼　嵐雪
夕納涼ひかるの花石みのかるの　弥坡
老ら方乃　まゝ　ゆや　懸　乃　例　岩翁
迷ひ子とおくるるもなりの夢　湖風
涼しさや蚊とおくるるの声　千皋

涼しさや　さ　ま　者　の　雑　乃　ゑ　の　ゆ　乙　由
見てあて　今　下　も　徳　ケ　ゑ　ゑ　み　ゑ　士
涼ゑとる　新　し　あ　れ　ま　の　那　宗　猫
蟬　ゆ　を　冥　ま　て　涼　し　井　の　京　馬　光
涼　し　さ　や　あ　ち　い　ろ　く　は　ま　な　や　起　彼
お　水　や　め　ま　て　ま　ひ　の　涼　し　　再　賀
あ　猫　ハ　ま　く　ま　ら　ま　ゑ　み　う　ら　蒼　狐
夏　ふ　例　如　風　や　月　夜　の　俳　ま　の　栗　堂
涼　し　ま　や　月　夜　乃　ま　る　懸　の　内　梅　郎
涼　し　さ　も　ま　し　異　ち　も　橋　乃　上　雅　郎

さらさらや風ふくるの日の蕊　狂素道
ひとりあるを納涼也　東の雲　平砂
出るもの〳〵納涼まぬ影も高欄舟
さら〳〵や蔦〳〵出るうれ胡ほうけ　伊勢　樗良
富士も船の茅とまつめ夕さらの　素山
さら〳〵やそもひとくの月夜ト人
月の出てうしろおなじ夕すゝ宝馬
涼まぬハ蔦〳〵れぬ黄あり色抜の色
涼しさやさられもやめ蔦の嘉の　律宜
黄昏の蚊ふ出るまつ門さゝみ　把菊

月宮ふ入るや五更の　さゝの妙孫乙雄
夕さゝ〳〵浴うやしてむ月の色水樹
月ちうやや山四もまる水の吉芝水
涼まぬ蔦て納涼ア人て分そ涼し　律富

十八接北あと畧す

けちるを服ふ人ゆるものハ号涼し　芭蕉

人のうゝまて

涼しんを森てたゝり剥る蔦ゝの其角

画賛

大虚涼し布袋の指のあく和ゝ

彩大橋毎中の伍

涼しさやすみよしの島　蛇貞佐

清水寺ふ詣て

涼しさやむすへハたる滝乃糸　井鳳

清水

日ちりの岩ちり使るしるし　京　常枝

一筋ハ竹も活けるる　泡清水　梅郊

ちしるしやハ掬へハ落ぬ　掌　栗堂

夏竹や清水ふ伸て牛の舌　素人

涼しさ　雀舟

むすぬるといさこの清水　爸梁

山の井や一口汁を　水素月

里童しいそく桶の泡清水　素班

清水ふ岩ふ走る　太存

汁清ふ汁山みて　宝馬

夏山ふくるつきて清水ふ津富

異きロふくるむるや山清水　雲風

乃濯く袋ふ出る清水ふ買明

けらし井

さらし井や蓮ふ墨さの翠る吉　素云

五百俳士

けらし井や田をみめぐりも水使き　五連

ちす

蓮

孤り〳〵や蓮ふ人〳〵ふしてゐるなり〳〵ろ　湖春

白蓮や平治ふ小ひ[illegible]殿　竹意

夏　卅六

麻てを〻〻蓮ふ誘ふ相ほ〻け其南

佛めぐて金色〻〻蓮の形秋色

六月の地獄ふそけ〻〻蓮のな蓮之

照るその相〻もの也蓮盛吐風

口ふ水ふくめる蓮ろはかそ北熟舟

鯉そ〻ていよ〻〻蓮は白ひ北百萬

蓮の香や呂しとひ〻〻くロの力木丹

ひるの月

昼の月

昼寝や暑いさかりも心乃役　舎秋
ゆるのちやうさく笠ふよく如雄　呉龍
昼点ハるふも負れさかり　この本　駝舟

青田

◎く風乃ゆくゑ風の青田　北公　曳
燕の後をきりゆく青田　〃　粥舟
徐子風ちく青田つゝ北　〃　簾

瓜

胡瓜ふよこれて涼しい瓜の山　芭蕉
干瓜や塩乃干沼北拵小ふる　仙蕉
紫うまふ嵐情こ瓜ふる　蒼狐
瓜畑やけ〻なとハ雅兼忍
肥道〻瓜の土ふ〻や俄照　花弥
むくとそとそ一朝一つんの瓜乃皮　木丹
素外ふ示す汉半なりて
そひこるハ俗きこの中ゆ瓜の蔓　蒼狐

くず

葛水

葛水や　そみのゝゆくゝたれ川　季吟

葛水や　何なら拾ひ　蕓ひろひ　亀文

くゝりゝや　墨きふちる　湯の色　吐風

葛水や　家も宝も　暗乃　家もれ　芳十

抱籠

俳や　伊達をきるの　俳人　冠生

夏　卅八

抱籠やひとゝせ子の中　十万里　希因

抱籠や　昔乃　年をひとゝ　心祝

暗や　裳ゝかゝむ　竹姫　人　貞川

竹婦人　叶君ちく　ハいそ　高を　泡亮

寄ちふや　夏　心ちゝの　供姫人　不禅

抱籠と　様ろゝい　ふ　来門　沾凉

切切

出　千

擅　忘て　芳　き　ため　さ　ゝ　云用　千　太来

祓と為て歩行てえらぶ土用干　其角
出干や一夏通ると　仲乃山貞佐
出干や我が孝あて　庭に猫い
出干や雄の干しもの　絶屑宗瑞
むしろ干や女こころの　花の陰蒼洲
孤うの論語おくり　土用干　平砂

混合

陰られぬ牛柱　八蕉　芭蕉

綿乃花たまくく蘭が例くく　北
番附を賣り祭乃きれ　北　光　角　玉
怠らて咲て乃ゝ乃ゝ　蓼　このか　才　磬
功麦やあゝ乃ゝ乃ゝる　腊乃上　文考
煙ゝり乃ゝ乃ゝ書尾の花乃　北　雨　国
刈株や廣ハ婆羅乃一　磬　貞　紅
夕点や扇ゝ乃ゝ　なめなゝ　心　祖
乃の屋ゝ流色の歴　齋乃ゝ面し　超　波
郷乃ゝ国乃はしま　辜　月　外　巽　窗
おもゝ事深るし為　ゝし汗拭ひ貞　磬

孫紀子や涼き教えうけ葵　梅郊

年毎に拙き句のふくろ角　貞知

拙き句を葵の上つゝ戸　心太　其葉

排さくはちすの四都れ宮居　紀亮

くちなしや朝くくハ花の拙い口　頓翁

葉も花も香も桐乃茂り北　雅叶

半拙し日も切りや虎の面　燕志

空葵の天の下ゝ邪日うゝかゝ　投静

咲かゝり花なてこのいけるく　玄推

拙句の風さへ拙し夏　柳　玉圃

岩花や元佐くゝ乃九形坂乙外

川拙や飛ハ佐ゝゝ如紀子中仙　幹

なるくゝ仙ゝゝ冬広の花盛　蒼雨

日ふうむ雛乃花や初苏子　巴波

橋や菅菅詰れ社宮乃軒　渙光

納涼とハ言ての後舟　燕

又ぬゝの和尚也小鮎うゝい

花の後山ふゝして

桜の実ゝて腹ぬゝ

蔬行

ゝゝ乃山一渋

帽子かなぐりまりの出れば丈艸

大森彦七西賛

姫といひし鬼ともいはれ百合の花　田室

素外新宅

宿札も水除らして木六月蒼狐

花除万句奥行之時

青しらて種ハ押れ庵のうし　栗堂

夏雑

うなり月や網ちあはぬらら　ちを坡

宣豆の花咲ずらう麦の穂　孤屋

佳名まり月夜や麻も帯角　素人

御扱

ささらしやなりそ流る年　忠　素堂

奴も塊もうれつき流され扱川蓮之

水売も出扱そ後残夕日　一巴

夕うやそれ暑さもちひ川　紀亮

吹流をみてゝ川ふ　麻　被　扶　静
ゆ扶ーーていよく松の書ゝ久ゝと　秋色
天の戸もぬやきを紅葉や夏神ふ山　蟻
夕風や忽行しもなりゝゝゝゝ　真岡　其文
行てえむ三十日の月と蛍掃を　操舟
ゆゝとなこめて夏茅掃の糸　五梁

誹諧古今句鑑　夏之部終

附録

夏之部

一陽井素外

飼鳥ふいさを水れむ　文衣
春きはふゝふゝや二京の夏衣
かけひゝうおもはのうゝの渇祭
君の代や天人ふ女之大矢数
若やゝゝゝ葉の陰の濡佛
椿の木も若葉ゝ色朝ゝけ

風をけて寒ふと笑める牡丹哉

曙や罌粟を洛とき花けうう

ゆうゆうと吉出ふ幸したるは哉

八重乃華一已の音ゝにたちたる色

爭のひあ寸 活し 地の色き

かとゝ夫は蛙や陸子哉初月哉

さとこうや声うう夜乃杜宇

かんこゑる蛙マさ月のをいは和

雲なうてきゆる初もの尺鰒

夜松魚やをれて洛氣水乃月

日昼の白きを見ゆる扇の形

廊下て月前 扇や田舎人

古歌扇よりなる一本を書き色

みゝうの形や袖ふ送らふ人うろ

袖夜やひ糸あるうう八雲なうう

照雲し厩ゝ世 世 世

懸ふ蚊乃我面ふ吾うゆゝなや

むゝ面ふ蠅も見合すうきす

雨滿る珠うゝ絶かるはふ

うゝ夕夾やあゆう周雲蛍月夜

[illegible]と宵のうち
文ふくろう芦の葉ぬけ見えや虹
蛍火やあるかなきの北斗月夜
[illegible]の点もたれて白虹月夜哉
人寄もとうげ雷やうつる屋
あつさをさめこの宿よ笹粽
粽結ふ宿や若世の風強く
[illegible]や公孫伸ハす宿の夜
田植女よ[illegible]てうせ[illegible]
まれくの鳴や田植の二夫婦

[illegible]初茄子
常寺やしすにて松の塚
蟬の寺ハ墨さも葉なる
水鶏きくや拾乃古戸北下屋敷
月の夜や早足ふ帯ふ鶏哉
月見屋やロ和一時水北泡
さうれや蓮花ふ這ふ宗佐坊
[illegible]と涼しうさなる月の初水
雅堂舎や山ていらるる秋
傘[illegible]やロハ蹴ふ通ふ志うら

江戸牛頭天王まつり

月雨や鮫さしを江戸の大幟

晴よけに雲こそよくも峯と成

半輪の月幽也雲のみね

夕立れて太菌のしつく哉

八つまでハかそふる蚊の暑のれ

田の仲も拯こ搜せ〳〵あつさ哉

夕暮や人ちえくとゆく納涼

風上ハ木葉屋なり門さくみ

入月ハ恨こやこ雲のつすゝ哉

此月ハ皆月夜なり 梅さくみ

次くさほを酒もこちゆ西遊ひ

夕風や川も暑れこと〳〵くし

山陰や清ものこ也忘れ

荒法や苦しもく〳〵れ玄此月

団扇こてゆくや京の廓の夕

暑きにをくしまぬ蓮のさかり哉

ひくくの水ハ苦もも破れ咲こ

此の戸此屋表ものの庭ハ田風

這こ玉こも去ハくこよ瓜の蔓

川端茅舎馬士や喜兵衛の茶碗くれ
隙居の高屋静かに瓶の花
ふところへ国の灯影や牛の人
抱籠やきぬぎぬ見れば裸むし
衣の香ふ人の使ひや古用干
出ほうや涼しき方ふ鍋の物
其角し神酒のうるむ川社
掛ものや汗ふき上達部
送別
掛ふとしる雅うてるも拾ひ記

年を隔てをるくの別をとぶに
来ませ又かほとふ古茶とあるぬうち
人の妻ろ一用居ふ
世をぞ治とゆし新茶もさやをの
嵯柏係賛
花はちりて八後の花牡丹
ちちふ文学るの人のもとて
書ふ向ふ疲をなる盗ふて火もと虫
木丹へつして改をちちは付
別れ夢もに居ふ暑さを淡くし

大師小詩てしわしも
夕ゑやくと東のは枝おろし

禪院にて

乱箭ふちる車なる百日紅

杜甫杜鵑

夜ハ朝と行あひの宮ちかもとき

附録夏之部終

朝倉氏物語

朝倉氏系図

小梅